

大都市カイロの一隅で動物に乗る人々 -人の流れデータ・海外パーソントリップ調査の社会調査的視点による再活用-

後藤 寛¹, 加藤 博², 熊倉 和歌子³, 佐藤 将⁴

¹横浜市立大学 国際教養学部, ²一橋大学 経済学部, ³東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

⁴横浜市立大学 大学院都市社会文化研究科

連絡先: <yutakagt@yokohama-cu.ac.jp>

(1)動機: データの得にくい途上国調査の補強として「人の流れデータ」の JICA による途上国パーソントリップ調査に注目し, 社会調査としての側面に注目し, 現地研究者の知見とのタイアップで新たな可能性を広げる.

(2)アプローチ: パersoントリップ調査の社会調査的情報を時間地理学的なデイリーリズムの発想から再解釈し, 職業・年齢・性別や移動目的および手段, 時間と都市空間内での位置の諸相から情報の入手しにくい海外都市の生活実態の解明に役立てる可能性を探る.

職業属性や移動目的だけでなく移動手段には当該都市/時期の個性が現れる. たとえばカイロはもともと公共交通の機関分担率が低く, バスにも何種類かグレードが存在し, 乗合タクシーのシェアが高いなど, 現地事情を理解していないとデータの解釈もできない. ここではその中であえて大都市圏の一隅に当時残っていた「動物に乗る人々 (animal drawn)」の時空間両面での p シチュエーションの解明を切り口に, 現象を追いつつ, この方法による都市空間理解の効果を測る.

(3)意義: 現段階では「人の流れデータ」本来の特徴である疑似非集計データとしての活用に至る前の段階であり, 過去 1 時点の情報という制約はあるが, 20 年前当時の社会情勢を加味し, 現地研究者の知見との連携によって大規模統計調査としてのメリットを引き出し得ると考えている.

(4)特徴: パersoントリップデータの価値の再発見と現地事情に詳しい研究者のコラボレーションにより, 意味のある統計データの活用と現地常識の見直しを目指す.

(5)結果: 21 世紀のカイロの発展速度はすさまじく, 19 年前のデータは歴史と割り切る必要がある. 当時

はカイロ大都市圏郊外でも動物に乗る(馬車もしくは牛車と推定)習慣が農民の間に残っていたはずで, 都市化途上の大都市内に残る農村的風景といえる. 当該調査が 11.7 万人を対象に 57 万トリップを調査する中で, 動物に乗るトリップは 220 トリップ(「乗った人」はのべ 115 人)と微々たる数でしかない. その 3/4 は想定どおり農民(農林漁業者)であり, 朝夕の「通勤」(畑への往復)に使われた点は想像を超えないが, 場所を検証することでナイル川左岸南部など農地の残存状況がわかる.

今後は「買い物・食事」トリップ, 「高校生」の生活スタイルなどさまざま切り口を替えて他のデータで把握できない過去の海外都市の生活事情を明らかにしていく.

(6)使用したデータ:【空間配分版】2001 年カイロ都市圏 人の流れデータセット

(7)使用したソフトウェア: ArcGIS 10.4

(8)謝辞: 本研究は東大 CSIS 共同研究 No.951 の成果の一部として実施した. ここに記して謝意を表したい.

(9)参考文献: 中村明・兵藤哲朗・山村直史・紺屋健一, (2004), JICA 都市交通開発調査データベースの紹介 -世界 11 都市のパーソントリップデータ-, 交通工学, 2004 年増刊号

(10)関連文献: 加藤 博, エルシャズリ アリ, 岩崎 えり奈, 後藤 寛, (2003), 世帯調査と GIS の接合の試み: 大カイロへのマイグレーション, 地理情報システム学会講演論文集, 12, 111-114.

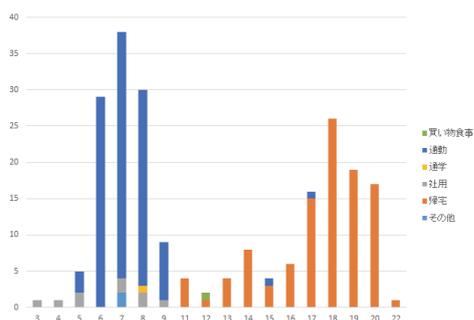


図 1: 時間帯・目的別動物乗りトリップ数

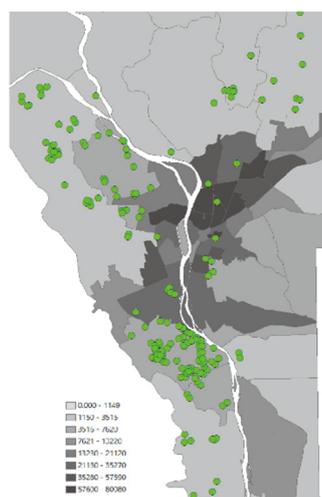


図 2: カイロ都市圏の人口密度と動物のりトリップ分布